

報道関係各位

日本消化器内視鏡学会(JGES) 附置研究会にて 原因不明の消化管出血(OGIB)の定義が確認された

カプセル内視鏡のパイオニアであり、世界 70 カ国以上 100 万個の販売実績を有するギブン・イメージング株式会社(本社/東京都千代田区、取締役社長/今江 博之)は、日本消化器内視鏡学会 附置研究会「第 5 回カプセル内視鏡の臨床研究に関する研究会」(2010 年 5 月 15 日開催)において、原因不明の消化管出血(OGIB: Obscure GI Bleeding)の定義が確認されたこと、また、「顕在性消化管出血(Obscure Overt GI Bleeding)」と「潜在性消化管出血(Obscure Occult GI Bleeding)」の両方の症例においてカプセル内視鏡検査の有用性が検討されたことを発表いたします。

日本におけるカプセル内視鏡検査が保険適用となる病態は、「上部および下部消化管の検査を行っても原因不明の消化管出血がある場合」です。

今回の日本消化器内視鏡学会 附置研究会では、下記が確認されました。

■原因不明の消化管出血(OGIB)の定義

米国消化器病学会(AGA)による OGIB の定義を基に、「原因不明の消化管出血」とは「顕在性消化管出血」と「潜在性消化管出血」の両方を含むという定義が確認されました。

■顕在性消化管出血(Obscure Overt GI Bleeding)について

「再発または持続する下血や血便などの可視的出血」を指し、現在出血中のものと過去に既往があるものの双方を指すことが確認されました。

■潜在性消化管出血(Obscure Occult GI Bleeding)について

目に見える明らかな出血ではないけれども消化管からの出血が疑われる臨床症状であり、具体的には「再発または持続する鉄欠乏性貧血(IDA: Iron Deficiency Anemia)症状。便潜血検査(FOBT: Fecal Occult Blood Test)陽性が再発または持続する場合(ただし大腸内視鏡検査で異常がなく貧血がなければ除外)」を指すことが確認されました。

また、カプセル内視鏡の臨床研究に関する症例発表では、国内の臨床例や海外の論文がエビデンスとして報告され、顕在性消化管出血の既往がある症例と潜在性消化管出血である IDA と FOBT 陽性の両方が認められる症例でのカプセル内視鏡の有用性が改めて確認されました。

さらに、大腸以外の上部消化管出血に対する感度が低い FOBT 免疫法が主に使用されている状況下、鉄欠乏性貧血症例において FOBT 陽性と陰性で小腸病変の検出率に差がないという報告もあり、「原因不明の鉄欠乏性貧血に対して、FOBT 陽性および陰性に関わらずカプセル内視鏡検査をするべきだ」という意見が提案され議論されました。

日本消化器内視鏡学会 附置研究会の代表世話人である獨協医科大学学長の寺野 彰 先生は「貧血の症状がある患者に上下部内視鏡検査を実施したが、カプセル内視鏡検査を行わず、後に小腸癌が見つかった症例があり、訴訟に発展するなど、医療水準に関わる問題が昨今発生している。カプセル内視鏡の一般化による認知と普及のバランス、そして適応に関する理解が重要」と発言し、顕在性消化管出血だけでなく、潜在性消化管出血に対してもカプセル内視鏡検査が必要とされていることを提言されました。

ギブン・イメージング株式会社は、今後も臨床現場において医師をサポートいたします。また、消化管疾患の早期発見・早期治療に貢献して参ります。

日本法人 ギブン・イメージング株式会社について

ギブン・イメージング株式会社(東京都千代田区、社長:今江博之)は、世界で初めてカプセル内視鏡を開発し、現在世界のカプセル内視鏡市場において豊富な経験を持つギブン・イメージング社(Given Imaging Ltd. 2001年NASDAQ 上場)の日本法人であり、日本におけるカプセル内視鏡の製造販売会社です。

<ホームページ>

<http://www.givenimaging.co.jp>

注) 日本では、PillCam[®] SB および PillCam[®] SB 2 カプセル内視鏡(小腸用)が承認されています。大腸用の PillCam[®] COLON、および PillCam[®] COLON 2、食道用の PillCam[®] ESO 2 はまだ承認されておりません。